

国語 1次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一ア	90.3		89.3		<p>本文は、村上雅郁著『きみの話を聞かせてくれよ』による。語り手である「私」の勤務先で、母校でもある新船中学校を舞台にして、「くろノラ」と名付けた一匹の猫と「私」と不登校生徒良輔との心の触れ合いを描いた話。くろノラを通して、中学生だった「私」の成長と「私」が養護教諭になってからの良輔の成長をテーマにした箇所を選んだ。</p> <p>また、問十四の参考文は、子安美知子著『「モモ」を読む シュターナーの世界観を地下水として』による。「傾聴」をテーマにして、くろノラとミヒヤエルエンデの描いた『モモ』の共通点についても考えていただきたいと思い出題した。</p> <p>問一 漢字書き取り。教育漢字の中でも低学年で学習するものが含まれているので、得点率は高かった。</p> <p>問二 活用する言葉（ここでは動詞）を適当な形に変え（活用させ）て答える問題。正答率9割前後なので落とせない問題。「鳴らし」の「ら」がないもの、「仰ぎ」の誤字が見られた。</p> <p>問三 擬態語。平易なため差がつかなかった。</p> <p>問四 慣用句。「神妙な顔」の出来が悪かった。</p> <p>問五～問十 傍線部を含む段落の要旨の理解を問う問題。問六Xは、自分の言葉で答える問題なので適当な言葉を考えるのが難しかったようだ。また問八は、抜き出し問題だったが、適当な二文を探すのに苦労したようだ。その他は概ね良好だった。</p> <p>問十一 良輔の心理の変化を答える論述問題。変化する前と後の対比構造が取れているかがポイント。また「……溶けるように消え（る）」という表現から、悩みが解消する、という意味内容が求められた。完全解答が難しいが、合格者の6割は部分点を獲得していた。</p> <p>問十二 本文の言葉を用いて空欄に言葉を入れる問題。そのままの抜き出しではないので自分で考えなければならぬが、6割前後の正答率がでているので、落とせない問題。</p> <p>問十三II ハーモニカの音色に込められた「私」の心理を説明する問題。「良輔の成長」、「『私』の教員としての喜び」がポイント。合格者の約5割が完全解答、部分点を取っている。読解力と記述力が問われる本格的な問題。</p> <p>問十四 「モモ」と「くろノラ」との傾聴に対する共通点を問う問題。本文を踏まえつつ、参考文との共通点を見つけることが求められた。「ただすわっている」、「賛成も否定的な判断も行わない」がポイント。完全解答、部分点を合わせると約8割が得点しているため、本文内容を理解している受験生が多かったように思う。</p>
問一イ	92.9		92.0		
問一ウ	98.1		97.3		
問一エ	89.0		85.3		
問一オ	89.0		92.0		
問一カ	91.0		93.3		
問一キ	54.2		60.0		
問一ク	91.0		93.3		
問一ケ	82.6		85.3		
問一コ	94.2		93.3		
問二 i	84.5		90.7		
問二 ii	94.8		94.7		
問二 iii	94.8		98.7		
問二 iv	98.7		98.7		
問二 v	69.7		76.0		
問三A	100.0		100.0		
問三B	100.0		100.0		
問三C	100.0		100.0		
問三D	98.7		98.7		
問三E	99.4		100.0		
問四A	11.0		8.0		
問四B	100.0		100.0		
問四C	95.5		94.7		
問五	67.1		78.7		
問六X	50.3	0.0	60.0	0.0	
問六Y	81.3	3.2	81.3	4.0	
問七	80.0		84.0		
問八	46.5		53.3		
問九	59.4		62.7		
問十	98.1		98.7		
問十一	1.9	54.2	4.0	60.0	
問十二A	67.1	10.3	72.0	12.0	
問十二B	53.5	2.6	53.3	4.0	
問十三 I	72.3		82.7		
問十三 II	6.5	34.2	9.3	44.0	
問十四 I	56.8		68.0		
問十四 II	11.6	59.4	17.3	64.0	

国語 2次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一ア	40.6		50.7		本文は、極地探検家・文筆家である角幡唯介氏の『書くことの不純』を素材とした。内容としては、従来の「到達至上主義的」な極地冒険のあり方と、狩猟を前提とした旅のあり方とを対比しながら、人間と土地（自然）との関係性の質的転換を論じたものである。 文章全体を貫く主題は、「計画・意志・効率」といった近代的価値観が、世界を均質化し、対象の固有性を切り捨ててしまうという構造への批判であり、それに對置されるものとして「組みこまれる」「調和する」という関係性が提示される。抽象度の高い議論ではあるが、具体的なエピソード（海豹狩猟、犬糞、アルパインスタイルなど）を通して展開されており、論理の流れを丁寧に追えば理解可能な文章である。
問一イ	20.6		26.2		
問一ウ	83.5		90.0		
問一エ	87.4		88.7		問一は、漢字の書き取りの設問である。「順守」「光明」は、受験生全体と合格者との間の正答率の差異が大きかった。耳慣れない言葉であっても、文脈から漢字を推測できることが求められている。 問二は、文と文、段落と段落の論理関係を把握できているかを確認する設問である。本文の論理展開は比較的明確であり、筆者の思考の流れを追えば対応できる内容であった。 問三は、本文に示された「従来の登山や極地冒険の土地のとりえ方」を、「ノートに整理しなおす」という形式で表現する設問である。本文では、文章の形で示されている内容を、論理構造が分かる図に置き換えるには、抽象的な内容把握の力と、情報の適切な取捨選択が必要となる。 問四は、海豹に関する具体的な記述を正確に読み取れているかを問う設問である。本文中の事実関係を丁寧に確認できなければ解答可能であり、基礎的な読解力がそのまま反映される設問であった。 問五は、「計算可能な要素に還元して」という抽象的な表現を、適切な具体例に置き換えることができるかを問う設問である。合格者の正答率が受験生全体に比べて約10%高く、具体と抽象を行き来しながら考える習慣の有無が、結果の差に表れていたと思われる。 問六は、狩猟を前提とした旅に対する筆者の主張について問う設問である。生物と土地、それぞれとの向き合い方を共に理解する必要があり、複数の観点から多角的に本文を理解する必要があった。 問七は、「到達至上主義的」な旅のあり方を説明させる設問であり、問六に示された筆者の価値観とは対極に位置する内容になる。「均質にみること」と「有利だ」の内容を、本文に即して具体的に言い換えるだけの設問だが、その両方を満たした解答は限られていた。 問八は、ここまでの読解を総合して整理しなおす設問である。一つひとつの選択肢は長く感じるかもしれないが、いずれも「到達至上主義的な旅」と「狩りを前提とした旅」を対比的に説明した後、筆者の旅に関する考え方をまとめる構成になっている。問七までの設問に解答することを通じて、これらの内容の整理が完了している受験生にとっては、決して難しくはない問いだったはずである。その意味で、本問の結果は、ここまでの読解をどこまで自分の中で統合できているかを、最も端的に示していると思われる。 あらゆる設問は、本文の理解・読解を助けるためにある、ということを感じてほしい。
問一オ	51.4		59.3		
問二1	96.1		98.6		
問二2	80.7		82.8		ここからは本文の後半、(中略)以降の設問である。 問九は、筆者の価値観を問う設問である。選択肢は、前半部分の内容を、筆者の考える「真の効率性」「真の自由」という観点から説明しなおした内容になっている。後半部分の準備体操となる設問である。 問十(1)(2)は、筆者の考える「芸術的」な行為の意味を説明した上で、それをゴッホという具体例に落とし込むことができるかどうかを問う設問である。(1)では、前半や傍線部の直前で語られていた土地との調和を、筆者の考える「芸術的」な生のあり方へと抽象化した言葉を探す必要があり、(2)では、それをゴッホの姿勢の説明として具体化する必要がある。問九で選んだ「真の自由」の説明(自我を離れ、対象や環境に主導権をゆだねる)を活かすことができれば、解答しやすい設問でもある。 問十一は、「アルパインスタイル」という登山の方法を問う設問に見えるが、これは、問十でも問うた「芸術的」な行為を、登山という具体例においてどう説明するかを問う設問である。問十二もこれと同様に、「芸術的」な行為を、極地探検と文筆という二つの側面において、どう説明できるかを問う設問である。 後半部分の問いは、前半で示された筆者の価値観を、様々な具体例に応用できるかを問う設問となっている。それは、最後の問十三においても同じである。この設問構成は、学園でのスタンダードな授業構成の反映でもある。 問十三(1)は、受験の「到達至上主義」的側面を捉える設問であり、(2)では、それに加えて中学での学びが「狩猟者視点」への切り替えを要求するものであることが問われている。いずれも、筆者の価値観を受験生の日常的な文脈と対応できるかを問う設問であり、全体的に正答率が高かった。一方(3)は、「狩猟者視点」をさらに具体化する設問になっており、受験生全体と合格者との間で10%弱の開きがあるとはいえ、いずれも低い正答率に留まっていた。会話の文脈が捉えられていない可能性もあるが、理論の具体化が苦手である傾向は、今回の問題全体においても感じられたことである。
問二3	99.2		100.0		
問二4	97.2		98.6		
問二5	81.5		83.7		今回の設問では、本文中の情報を正確に読み取る力に加え、筆者の示す価値観や思考の枠組みについて、段階的に理解を深められるような構成とした。とりわけ、解答を通じて整理した内容を総合して判断する設問や、前半での理解を具体例へと展開する設問では、理解の深まりの度合いが結果に反映されやすかったといえる。 文章をバラバラの部分として処理するのではなく、筆者の問題意識や価値観と対話しながら読み進めること。その理解を、別の具体例や身近な事例・経験へと移し替え、自分事として捉えなおすこと。それこそが、本文でも示されていた「狩猟者視点」に立った「芸術的」な生き方につながる道であると考えている。
問三A	72.2	22.4	75.6	20.8	
問三B	84.3	3.6	85.1	3.2	
問三C	32.9	2.8	37.1	3.2	問十三2-W 問十三2-X 問十三2-Z
問三D	71.0	21.3	76.5	19.5	
問四	74.0		79.6		
問五	35.2		46.2		問十三3 問十三1-ア 問十三1-イ 問十三1-ウ 問十三1-エ 問十三1-オ
問六	41.6	56.0	46.6	52.9	
問七	2.8	62.2	4.5	70.6	
問八	61.4		75.6		問十三1-ウ 問十三1-エ 問十三1-オ
問九	65.6	31.6	71.0	28.5	
問十	0.0	44.5	0.0	48.9	
問十一	51.4		60.6		問十三1-ウ 問十三1-エ 問十三1-オ
問十二	26.7	60.4	33.0	57.5	
問十三1-ア	95.9		99.1		
問十三1-イ	90.5		95.5		問十三1-ウ 問十三1-エ 問十三1-オ
問十三1-ウ	88.4		91.9		
問十三1-エ	96.1		98.2		
問十三1-オ	95.6		98.2		問十三1-ウ 問十三1-エ 問十三1-オ
問十三2-W	78.1	15.7	84.2	11.3	
問十三2-X	77.1	1.8	87.3	2.3	
問十三2-Z	72.5	7.2	78.7	7.2	問十三1-ウ 問十三1-エ 問十三1-オ
問十三3	26.2		35.3		

問題	正答率 (%)				講評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一ア	71.2		78.9		<p>出典は高橋久美子『いい音がする文章』。筆者はかつてチャットモンチーというロックバンドのドラムを担当していた。現在は農業をする傍ら、文筆業を中心として活動している。</p> <p>出題箇所は、前半が小学校の教科書に載っている詩を取り上げながら、ことばと身体性の関係についての考察が行われる部分。またリズムやメロディーといった音楽的な要素についても取り上げられている。中略を挟んでの後半はSNSなどのテキストコミュニケーションが氾濫し、さらには過度に「空気を読む」という風潮についての筆者なりの考えが述べられている。全体的に平易な文章ではあるが、その裏側にある筆者の問題意識について問う問題も多く、言葉の表層だけを見て解答を決定しようとする間違えてしまうものも多かったのではないだろうか。</p> <p>問一、漢字の問題。正答率が低かったのはエ「商談」、カ「余程」。合格者は10ポイントほど正答率が高かった。</p> <p>問二、語句問題。「抑揚」という単語が受験生にはあまり馴染みのないものだったのだろうか、正答率が低めだった。</p> <p>問三も正答率は低め。「7・5」は文字数のこと。7字、5字のリズムになっているものを選べばよい。正解はウ。</p> <p>問四は「適当でないもの」を選ぶことに注意。他の選択肢は詩の魅力や自分の幼い頃に触れているのに対して、ウだけが見当外れである。</p> <p>問五と問六はセットになっているような構成。前者は「言葉と仲良くなる」という比喩を具体的に理解できているかを問う問題であり、後者は言語の持つ身体性という側面が持つ特徴を問う問題である。問六の得点率が低かった。受験勉強に言及しているオはダメ。本文全体を通じたコミュニケーションという観点からの判断が欲しかったところ。あえて傍線部を引かずに「言語と運動の関係」という聞き方をしているのもそのせいである。</p> <p>問七、「あ」という音のイメージが浮かべばそんなに難しくはないのではないだろうか。エはAの部分が「生き生きとした発声」になっているのが誤り。どう発音するかが問題なのではない。</p> <p>問八は「夕日がせなかをおしてくる」という詩の説明。ア「荒々しさ」、イ「『ばんごはん』のことを想像せざるを得ない」、ウ「『さよなら』という語が四度繰り返され」、エ「友情が感傷的な雰囲気表現され」がそれぞれ誤り。タイトルにもあるように夕日は擬人的に表現されている。</p> <p>問九、詩がメロディーに乗ることによって幼い頃の筆者が違和感を抱いたというのがここでのポイント。よって正解はエ。ウは「歌とは単調なものだと思っていた」が誤り。</p> <p>問十、やや難しい問題だったかもしれない。傍線部のあとの松任谷由実『春よ、来い』に関する言及が根拠になる。「歌詞と曲と合わせて100になるように作っている」、「曲を味わってから、歌詞を読んでほしい」という記述からエが正解だと導けるだろう。</p> <p>問十一、主語は「対面のやり取り」「目と目を合わせて会話すること」である。その良い面と悪い面はどのように生まれるかといえば、文字情報以外の微細な感情のニュアンスなどが入ってきてしまうからである。</p> <p>問十二、「セッション」「キャッチボール」という比喩は何を示しているかという問題。問十一とほぼセットになっている。文章展開に応じて、「受験生がここを理解できているか」といったポイントを設定しながら作問を行っているので、単に出た問題が順番に解くのではなく、前後の流れを意識しながら解答することを心掛けてほしい。</p> <p>問十三は「ご時世」＝現代社会の在り方についての筆者の認識を問う問題。問十四とともに正答率が低い問題であったが、どちらも合格者平均は受験者平均を10ポイント程度上回っている。</p> <p>問十四は「もっとも会話がかみ合っていない生徒」を問う問題。正解はAさん。「人の話を素直に受け入れる」という意味での「聞く」の部分が誤り。「聞く」ことは必ずしも相手の言葉を素直に受け入れるばかりではなく、聞く側（自分自身）の考えとの対話でもある。具体的なシチュエーションを想像しながら解答したい。</p> <p>問十五、傍線部は「自分の意図とは違った形で相手に伝わってしまう」ことを意味しているので、そうでないものが正解。嫌な気持ちを示した返事をとがめられた＝誤解は生じていないのでエが解答となる。</p> <p>問十六、本文をまとめる形での記述問題。受験生に意識してほしいのは、傍線部の説明＝言い換えというセオリー。傍線部の前に「塩梅」に関する記述があったせいだろうか、そこに引っ張られた解答が目立った。ただ、これだと六十字という字数の中で多くのロスが発生してしまい、後半の言い換えができなくなってしまふ。またいい塩梅＝曖昧さがどうつながるのかも不明瞭になる。そもそも筆者の中心的主張は「空気を読まなくてもいい」という内容なのだから、調和について言及する必要はない。自分のリズムを活かして言葉を発し、それが相手に受け止められ、楽しくその世界が発展していく。そんなイメージで捉えると、解答が作りやすくなるのではないだろうか。</p> <p>問十七は萩原朔太郎の詩集『月に吠える』の序文を引用し、それと本文を関係させた設問。(1)は読解。萩原朔太郎が目指しているのは人間の感情を表現することであるので、アが正解となる。(2)は本文と参考文の関係を問う問題。どちらの文もリズムの重要性が語られているので、ウが正解である。オは「個人の世界が広がる」という部分が誤り。</p>
問一イ	86.3		77.2		
問一ウ	86.3		89.5		
問一エ	48.3		59.6		
問一オ	84.4		84.2		
問一カ	48.8		56.1		
問一キ	76.6		75.4		
問一ク	67.3		78.9		
問二A	38.0		49.1		
問二B	75.1		80.7		
問二C	93.7		89.5		
問三	25.9		22.8		
問四	71.7		71.9		
問五	60.5		61.4		
問六	17.6		17.5		
問七	30.2		28.1		
問八	42.0		47.4		
問九	41.5		45.6		
問十	32.2		31.6		
問十一	19.0	73.7	21.1	68.4	
問十二	52.7		45.6		
問十三	16.6		24.6		
問十四	15.6		28.1		
問十五	61.0		68.4		
問十六	2.0	62.4	3.5	64.9	
問十七1	50.2		56.1		
問十七2	38.0		36.8		